

7) 天然痘で読み解くかちかち山

Smallpox and the Japanese folk tale “Kachi kachi yama”.

九州歯科大学 竹原直道

Tadamichi Takehara, *Kyushu Dental College*

背景: 演者は既に日本歯科医史学会(横浜, 2008, 抄録参加) および日本医史学会(佐賀, 2009)において、江戸後期の黄表紙本に登場する豆腐小僧が、疱瘡神のパロディーとして描かれたことを論考した。香川雅信氏によると、1770年代の江戸において、妖怪が突然大量出現する妖怪革命(『江戸の妖怪革命』, 2005)が起こったという。当時江戸では天然痘が大流行し、1772年には3カ月間で19万人が死亡した。この天然痘の大流行は、人口動態ばかりでなく文学、演劇、見世物や草双紙など庶民文化に大きな影響を与えた。そこで演者は、この妖怪革命が天然痘の流行によって引き起こされた継発現象ではないか、と考えた。豆腐小僧もこのなかに位置付けられる。天然痘の大流行はしかし、一人豆腐小僧のみならず描かれた妖怪群そのものをも疫病神として可視化させたのではないか。疫病流行史は妖怪をキーワードに加えることによって、その背景がより鮮明に浮かび上がるのではないか。そこで今回は日本昔噺の一つ「かちかち山」を切り口に検討を試みたい。

赤本のかちかち山: 「かちかち山」は、多くの昔噺がそのルーツを「風土記」や、「御伽草紙」に持つのに対し、江戸期よりさかのぼるのは難しいと考えられている。15世紀の「十二類合戦絵巻」には、兎に打たれる狸の図があるが、書かれた「かちかち山」の源流は、今のところ17世紀の赤本「むちな敵討」と看做されており、その後「兎大手柄」へと受け継がれる。この二編(鈴木重吉ほか編:『近世子供の絵本』江戸編, 1985)で「かちかち山」の原形は完成した。「百鬼夜行絵巻」でも明らかに図像化された妖怪は、その表現形態(例えば器物)とともに、その正体をも図示されるという二重構造をもつ。妖怪の正体は鬼や狐狸であり、そのことは、江戸庶民の共通認識であった。

一方兎は、古事記の時代から医薬と深い関わりを持ち、疱瘡絵の木兎(みみずく)も疱瘡除けの呪力を期待されていた。これに対して狸は、狐と比べて江戸期以前の登場は少ない。とはいえここは兎を医薬、狸を疫病神と見立てたいところである。しかし赤本の「かちかち山」から天然痘と狸との関係を直接類推することは難しい。

黄表紙本のかちかち山: ところが黄表紙本の「かちかち山」になると様子が違う。朋誠堂喜三次作、恋川春町画の「親敵討腹鞍」(おやのかたきうてやはらつづみ: 1777)は、「かちかち山」の後日譚という仕掛けで、親狸を泥舟で殺された子狸が、今度は兎に仇討する話になっている。そこに爺婆の息子が疱瘡の予防薬に兎の生胆を取る話を絡め、最後は鰻屋の宣伝で終わるという凝った趣向である。狸を疱瘡神に見立てている訳ではないが、兎や鰻は天然痘の薬、狸は兎の敵役として、そのイメージは一貫している。

狸のイメージ: 同時代に描かれた狸図像には、大笠を被った狸、酒買い小僧の狸がみられる。大笠は疫病神のシンボル、酒徳利も疱瘡神、本来は疱瘡守護神、の持ち物である。医師の間では胎毒論が有力ななか、未知の病原体Xを、旅する疱瘡神あるいは妖怪として具象化する方が、病因論としてはより理に適っている。恋川春町ら江戸知識人の鋭い眼差しに魅せられる。橋本伯壽が断毒論を発表するのは、ようやく19世紀に入ってからであった。

まとめ: 安永・天明期の江戸庶民が懐いていた天然痘への漠たる不安は、妖怪の大量出現という形で表出された。つまり妖怪革命とは疫病大流行の結果引き起こされた文化現象と考えられる。以上の点から、医史学において妖怪を研究対象とする妖怪医学の視点を提起したい。